

僕アホやない人間や

今から数年前に、一人の重い知恵おくれの子どもが死にました。

十二月のことです。てんかんをおこして、そのてんかんが重積していきました。どうしても発作がおさまらないものですから、私たち、あわてて病院につれていったのですが、

こんな重い知恵おくれの子どもは、入院させられない。入院させると、看護婦も嫌がるし皆に迷惑がかかるから」

と言って断われました。仕方なく、次の病院へ行くと、そこでもまた、断われました。同じ理由なのです。

最後にある病院にたどりつき、入院できたのは十二月の二十九日でした。その時、もうその子どもは虫の息でした。

やっと一つの病室に入れました。入院するとお医者さんがちょっと来られ、その後、来てくれません。止揚学園の保母が、体温を計ろうと思って、体温計をこの子どもの腋の下に入れたら、水銀がバーンとつきぬけ、体温計がこわれました。体温を司る部分が侵され熱が高くて計れなかったのです。びっくりした保母が、お医者さんのところへ走っていきました。

十二月二十九日ということで、看護婦さんもお医者さんも少なかったということが原因したのですが、そのお医者さんが、

「そうあわてなくてもよいでしょう。適当に行きますから。もうあの子どもは、助からん。あのような子どもは、死んだ方が、お父さんもお母さんも、君たちも喜ぶのどちがうのですか」って言われたのです。「今まで苦勞ばかりかけてきたのやから、お父さんもお母さんも喜ぶのどちがうか」と考えられたのでしょね。

私は、保母からそのことを聞いてカーツと怒りまして、お医者さんのいる部屋に飛び込み、胸倉をつかまえて、力まかせにひきずるようにしてその子どもの病室にお医者さんを連れて来ました。お医者さんは大きな声で怒鳴り、怒ったのですが、そんなこと聞く耳もありません。

お医者さんが、その子どもの脈をとって下さった時、すでにその子どもは死んでおりました。「ご臨終です」

ところがその言葉を聞くと、保母たちは、「ワァーッ」と言うなり、そのお医者さんを床に突き飛ばしてしまったのです。お医者さんは床にパターンと倒れました。そこで「止めなれば」と思ったのですが、どうしてもそうする気持ちになれませんでした。何故なら「こんな子どもは、死んだほうが喜ぶだろう」って言ったお医者さん。「どんなに小さな生命といわれても、その子どもが生きていく人間の歴史は、偉大なすぐれた歴史だ」と考えていた職員、保母たち。その保母たちの怒りがその子どもが死んだ時、そういう形でしか出せなかったんだと思うんです。

そういう保母たちを見て、多くの人が、
「女やない。恐ろしい」

って言います。しかし、私はいつも言うのです。
「皆から誤解をされたり、悪口を言われたり、少しも自分の得にならないのに、なお、この子どもたちと真剣に生きていくこの保母たち。ほんとうにやさしい心がなかったら、女らしさがなかったら、この子どもたちと共に歩めますか」
そんな思いが、お医者さんとぶつかってしまったと思います。

止揚学園でその子どものお葬式をしました。

たくさんの方が集まって下さいました。そして式の前や、あるいは弔辞で、「こんな素晴らしい子どもはいなかった」「こんな美しい心をもった子どもはいなかった」と言ってほめて下さったのです。しかし、私は、ほめられればほめられるほど、心の中に大きな怒りが燃えました。

最後に挨拶をしたのです。
「今日、こうして皆さん集まていただきましてありがとうございます。また、この子どもをほめていただいて感謝しています。

しかしその反面、私の心に大きな怒りがあります。それは、この子どもが活着ている時によく私のところに来て、「先生、僕アホやないなあ、人間やなあ」って言うおりました。何故なら、この子どもが止揚学園から地域社会に帰って行くと、今日集まって下さった皆さんが、「お前、アホやから止揚学園にいるんや。十九まで就職でけへんのは、アホやからや。ごくつぶしや」いろんなことを言うて下さった。

その中で、この子どもは重い知恵おくれの子どものために抗議ができなかった。しかし、はかり知れない深い悲しみをもって止揚学園に帰ってきました。そして僕のところにとびこんできて、「先生、僕アホやないなあ。ほんまに僕人間やろ」と、何度も言うておりました。私は、その時いつも、身体に障害をもたない、頭の強い私に対して、この子どもが抗議しているのだと思えてならなかったのです。

今日、皆さんはほめて下さった。しかし、今ごろほめていただいて何になるのですか。何故、この子どもが生きている時に、今日のような言葉を下さらなかったのですか。こうして集まって悩みを聞いて下さらなかったのですか。もう、遅いじゃありませんか。この子どもは何も知らないで、天上に召されてしまいました。

今ここにいる皆さんや私は、すぐここから出ていくべきじゃないでしょうか。そして私たちが働いている職場、学んでいる学校、あるいは家庭、地域社会の中で、この子どもたちが、『僕アホやない人間だ』と激しく叫び、抗議をしていることを伝えるべきではないでしょうか。こう、激しい挨拶をしたのですけれども、私は、あの子どものあの思い、あの言葉を、私の心の中に、一人で納めておく気持ちになれなかったのです。

実は、この子どもは、激しく所属を奪われていたと思うのです。基本的な人権を奪われていたと思うのです。日本人として存在していても、所属を奪われたらどうして生きていったらいいんでしょうか。それを奪ったのは、ここにいる私や、ここにいる皆さんではなかったでしょうか。

その私たちが、この子どもたちを、「不幸な子どもだ」「この子らを世の光にしてやらんといかん」「この子らに愛の手を」「この子らにカンパしてやってなあ、この子らを少しでも助けてやろう」って言うんです。そして、「かわいそうになあ」って言うんです。

こんな残酷なことがあるでしょうか。この子どもたちを不幸にしておいて、実存を奪うておいて、「かわいそうに」と言う。こんな高慢なことがあるでしょうか。

ほんとうなら、「私たちが君たちを差別して不幸にしているんだ。どうか許して下さい」そう言って、心からあやまらなければいけないのです。持っているもの総てを投げ出して、その人たちが許して下さいまで、あやまり続けなければいけないのです。

「嫌われ、恐れられ、いやがられて」 福井達雨 著
止揚学園の園長